

生徒が自走できる

“聞きっぱなし”を脱却する リスニング授業モデルの構築

大垣北高等学校 松浦桃香

1

目次

- 01 テーマ設定の理由
- 02 研究内容
- 03 成果と課題
- 04 実践を通しての感想

2

テーマ設定の理由(生徒目線)

- 生徒はリスニングに漠然とした不安感を抱えている
クラスアンケートより、半数以上がリスニングが苦手だと回答
- 聞こえない理由を把握していない
リスニングができないと単語力がないからだとひとくりに考えがち。しかし実際には音のつながりを知らないだけだったり、文法がわかっていないだけだったりする。
- 自分で学習する方法が明示されていない
どう勉強すれば良いか分からない生徒が多数存在する

3

テーマ設定の理由(私自身の困り感)

- リスニング活動が「流しっぱなし」「確認問題だけで終わる」
リスニングを独立した活動ではなく、文法やリーディングの通常の授業の中に組み込みたい。
- 生徒に最適なフィードバックができていない
生徒によって苦手は様々。一律の指導ではなく、各自の弱点に気づかせ、生徒に自学を促すフィードバックを行いたい。
- 生徒に自信を持たせたい
漠然としたリスニングの苦手を解消し、少しずつ成長できているという実感をさせてあげたい。

4

研究内容

ログデータをもとに授業へフィードバック

- 最初は振り返りをもとに教員がフィードバック
- 週末に取り組むべきことを個別に提案
- 例) TED Talks視聴、シャドーイング、文法確認など

負担が大きく、途中からABC選択制に変更

A:関連TED Talks視聴 B:関連文法復習 C:スクリプト音読

9

研究内容

リスニング授業のルーティン化

Before Listening

背景知識／文脈予測／キーワード予測

While Listening

タスクに集中 (例：要点チェック／True-False／情報マッチ)

After Listening

キーワード再確認・スクリプト精読・感想・要約・反省

自己課題決定

10

成果の分析

項目	内容	結果
定量的分析	リスニングテストの過年度との比較	差はなかった
定量的分析	リスニングテストの前期との比較	差はなかった
定性的分析	アンケート調査	1年を通してリスニングの力が向上したと7割が回答
定性的分析	振り返りコメントの変化	生徒の振り返りの変化 例) 速すぎて無理から意外といけるへ

11

成果(生徒側)

- リスニングの解像度と自律性の向上

なんとなく聞こえないと言う諦めから、語彙不足・連結が苦手等を分析して捉える姿勢が身についた

- 学習効率の最適化

自分の弱点に合わせた家庭学習(シャドーイング、反復復習など)を選択できるようになった

- 成功体験の可視化

ログを見返すことで前は聞こえなかった音が今は聞こえると言う成長を実感できるようになった

12

成果(教員側)

- ・ **リスニングと日々の授業との統合**
リスニングを独立させず、読解や文法の授業に音声的な注意点を組み込む習慣ができた
- ・ **指導の優先順位の明確化**
ログを集計し、クラス全体がつまづいているポイント把握、授業のウォームアップ等で効率的に補完できた
- ・ **生徒理解**
点数だけでは見えない、生徒一人ひとりの学習の癖や努力の過程を把握できるようになった

13

課題

- ・ **質のばらつき**
分析の深い生徒とただ難しかったと考えるだけで終わる生徒の差は大きい、良質な分析を共有し、振り返りの質を上げる工夫が必要
- ・ **文法リーディングとの更なる連携**
同じテキストを多角的に活用する教材選定の工夫が必要
- ・ **評価への反映**
- ・ **教員の負担感の軽減**

14

実践を通しての感想

リスニング力を上げる難しさ

指導していく中で、リスニングの力は決して独立して存在するものではないと強く実感した。

リスニングの向上を目指す過程で、そこには日々の文法習得やリーディング演習との明確な相関関係がある。文法構造が定着していなければ、音として聞き取れても意味の理解には至らない。また、リーディングで処理できない速度の英文は、耳から入ったとしても脳が処理しきれない。

「リスニングだけ」を切り離して引き上げることは困難であり、あらゆる学習の繋がりを意識した多角的なアプローチこそが不可欠であると、指導を通じて改めて痛感した。

15